

日本ボストン会会報

会長就任挨拶

私とライマン家のご縁

会長 山村 章

昨年(2008)の総会で、鶴正登会長の後任として会長を拝命いたしました。

佐々木浩二前々会長とは慶応義塾大学工学部の同期であり、「ボストン会というのがあるけど会長をやるらないか」とあの笑顔で誘われ、お引き受けすることとなりました。私のような中小企業の現役が引き受けてしまい大変恐縮している次第であります。

1967年にノースイースタン大学大学院に入り、奨学金として月500ドル貰うことができました。当時の日本での我々の初任給は60ドル程だったので、500ドルは大金でした。

後で判ったことですが、これは貰いっぱなしのお金でなく働く代償としての給与でした。大学1、2年の学生に対して熱力学・材料力学などを教える助手としての報酬だったのです。初めから判っていたら尻込みをしたでしょうが、それが結果として幸いました。

翌年には、女房の清子もボストンにきまして、次の年に長女が産まれました。これでは働かないといけない、という事でケンブリッジにあったケムピオン社に修士課程修了と同時に入社しました。初めは数年したら日本に戻るつもりが結局、現在のフェローテック社の創業まで足掛け15年アメリカにおりました。

ボストン市内で長女が、郊外のアーリントンで長男が、そして3年程暮らしたユタ州のブランディングで次男が産まれました。そんな訳でアメリカ、特にニューイングランドにはお世話になっています。

さて、ノースイースタン大学の隣にボストン美術館がありますが、日本美術のコレクションで有名なのは皆様ご存知のことと存じます。私は、こんなに美術品が集まったのも第二次世界大戦の戦利品かと思っておりましたが、実はそうではなかったのです。

初めに就職したケムピオン社のオーナーであるジョーゼフ・ライマン氏は、私の父と同じ年齢であり、有名な科学者で第二次世界大戦のレーダー開発の総責任者でした。私は、彼のお蔭でアメリカにあんなに長く居ることが出来たと思うくらいの大恩人であり、師でした。



ある時、彼が日米通商100周年の記念の楯と三省堂出版の「ベンジャミン・スミス・ライマン先生小伝」(以下B.ライマン)という本を見せてくれました。B.ライマン氏は、ジョーゼフ・ライマン氏のご親戚にあたる方です。

明治政府が当時外国の技術者、教育者などを招いて日本の近代化を進めるなかであのクラーク博士達が招かれました。B.ライマン氏も日本鉱脈探索およびその技術の教育者として招かれたのです。

明治5年に来任し、8年間携わっていましたが、彼自身はその結果に満足していなかったようです。一旦マサチューセッツに戻った彼は自費で再来日し、大勢の弟子を雇って仕事をさせました。数年後、彼は北海道や秋田の石炭・石油の鉱脈地図を完成させ、今の平河町に所有していた600坪ほどの土地を屋敷ごと明治政府に寄付しました。

実は、ライマン家は石炭で大成功した名家で、お金に困っていませんでした。明治政府はお金を受け取らないB.ライマン氏に日本の美術品の数々を贈呈したのです。帰国後、明治天皇の誕生日にはハーバードなどの日本人留学生を自宅の晩餐会に招いて、日章旗を掲げた親日家です。

彼の死後、ライマン家はこの美術品をマサチューセッツ州のノースハンプトンの美術館に寄贈しましたが、それがボストン美術館に集められました。それが基で、より多くの日本美術品がコレクションされたのです。

日本ボストン会が、会員とボストンとの絆を保つだけでなく、先人が成した様な日米友好の場として発展できればと願っております。皆様のご健勝と日本ボストン会の発展を祈念し、また皆様からのご指導をお願いいたしまして、会長就任の挨拶とさせていただきます。